（安達ヶ原の解説）

この長唄は、しばしば演目に上がる。老婆が僧を追いかけて行く場面は三味線や、お囃子の迫力で正直、怖い。それが魅力で観衆は聞き入るのである。経文読誦の法力で迷える霊、悪鬼を調伏するのは、この安達ヶ原の他にも、よく出てくる場面設定である。

例えば、「船弁慶」では、奥州に落ち延びようとする義経の前に、滅ぼされた平知盛の怨霊が長刀をかたげて立ち塞がる。それを弁慶が経文読誦し数珠を摺って調伏するのだが、この知盛の怨霊が出現する時が怖いのだ。他に「娘道成寺」でも「安達ヶ原」でも仏への祈りの力が見せ場に使われている。

鬼女となって安達ヶ原に住むという伝説の地に、ある儒者が訪れている。江戸中期に、全国を経巡って漢詩を残している、佐賀藩の石井鶴山である。松尾芭蕉も全国を行脚して俳句を残している。種田山頭火もそうである。

漢詩、俳句、自由律詩とスタイルは違えども、皆、旅を愛し、戸の上下はあっても、同人、門人との酒を楽しんだことは共通する。芭蕉の一番弟子の其角も、山頭火も無類の酒好きであったから、「崩角」もあったかも知れない。鶴山も酒が大好きで、筆者の家には「一夜梅花百撰」を残した伝承があるが、稿は残っていない。

さて、鶴山の安達ヶ原の漢詩は如何に。

安達原　石井鶴山

黒塚上、安観音大士
安達原頭四望平　翠磐中築老婆城
野花猶見朱唇色　寒草空留黒塚名
行路寒心扛鼎力　機縁崩角誦経声
即今翻現補陀界　日夜潮音樹裡鳴

安達原（訓読）

黒塚に上り、観音大士を安んず
安達原の頭は四望平にして
野の花は猶朱唇色に見ゆるも　翠の磐中に老婆は城を築く
寒草は空しく黒塚の名を留む
行路に寒心し力を扛鼎すれば　機縁は誦経の声に崩角す
即ち今翻せば陀界の補現れ　日夜に潮音は樹裡に鳴ゆ

石井鶴山の奥羽紀行にて記さる

（現代語訳）　【石井鶴山 作】

黒塚に上がってから、観音菩薩堂にゆっくり参拝した
安達ヶ原の始まる所は、四方が平に広がっており、
苔むした磐掘の中に、安達ヶ原の老婆は城を築いたのであろう。
野辺には、紅差す美女の唇のような赤い花が咲いているが、
老婆の亡骸は寒草に埋もれて、黒塚という名を留めているだけだ。
老婆の生き様に、恐ろしさを覚えた僧が力を込めて祈ると、
読経の声に悪しき機縁はくずれ去った。
即ち、改心した瞬間に仏界からの助けが現れた訳だが、
仏の慈悲は日夜、黒塚に生い茂る樹々の内に聞こえている。

令和五年十二月二十四日　大中臣正比呂　拙訳